

オーディオ実験室収載

LINN LP-12 の再構成(41) (HP 収載)

—総合試聴—

1. はじめに

LINN LP-12 の再構成とともに ThorensTD124 と Garrad401 の再構成も実施し、先に S 氏と ST 氏にご来臨いただき、現状を確認していただき、LINN LP-12 の再構成(40)で報告しました。今回は、M 氏、ST 氏にご来臨いただき、同様に現状を確認していただくことにしました。

2. LINN LP-12 その他総合試聴計画

まずは、耳慣らしのために、バックハウスのベートーヴェンの LONDON 盤とショルティ指揮ウィーンフィルのワーグナーのワルキューレの LONDON 盤を聴いていただいた後、ご持参盤のイコライザー特性に応じた ZANDEN の設定条件の探索を行います。

さらに、RIAA のみのフォノステージの場合、その他のイコライザーカーブの盤について、本来のイコライザー特性への対応を Leak Point 1 のトーンコントロールと Brooklyn DAC+ の位相反転でどのくらいカバーできるかの確認を行います。

さらに状況により、メインの LINN LP-12 の他、ThorensTD124 や Garrad401 による再生も行います。

最新盤では、どうかということで、時間の許す限り下記の中から希望により試聴していただきます。

フルシャのスマタナ我が祖国 (45 回転ダイレクトカッティング盤)

ヒラリー・ハーンのイザイ無伴奏ヴァイオリンソナタ (45 回転盤)

チェリビダッケのブルックナー4番 (ライブ収録盤)

ムーティのウィーンフィル NY コンサート 2025 (ライブ収録盤)

小川理子トリオ (78 回転盤)

参考のために、STAGE+ の配信で、フルトベングラーのドン・ジョバンニ、ポリーニのベートーヴェンのソナタやワイゼンベルグとカラヤンのチャイコフスキイのピアノ協奏曲1番、オペラのガラコンサートの椿姫の4重唱なども聴いていただきます。

3. LINN LP-12 その他総合試聴結果

バックハウスのベートーヴェンの LONDON 盤とショルティ指揮ウィーンフィルのワーグナーのワルキューレの LONDON 盤は、ともに DECCA、R、第4時定数 Mid で聴いていただき、違和感はないということでした。

そこで、M 氏ご持参盤の試聴に移り、最初にフリッツ・ライナー指揮ウィーンフィルのブラームスのハンガリアンダンスの DECCA 盤は、DECCA、R、第 4 時定数 Mid で問題なかろうということでした。

次にテレサ・ベルガンサのモーツアルトオペラアリア集の DECCA 盤、LONDON 盤、LONDON（国内盤）の聴き比べでは、前 2 者は DECCA、R、第 4 時定数 Mid で問題なかろうということでした。LONDON（国内盤）は DECCA カーブでも良いが TELDEC カーブでもよいのではないかという声もありました。いずれにしても、ベルガンサの清純なソプラノの魅力は十分です。

次のマルティン・ガリングの弾くワーグナーのピアノ曲集ではどうかということでしたが、EMI、R、第 4 時定数 Mid で落ち着きました。

さらに WESTMINSTER の聴き比べを ウィーンコンツェウトハウスのハイドンの弦楽四重奏曲 Dminor で、国内盤 1 枚と発売時期のことなる米国盤 2 枚について実施しました。国内盤は、EMI、R、第 4 時定数 Low、米国盤はともに Columbia、R、第 4 時定数 Low となりました。

同じく WESTMINSTER の聴き比べを、 ウィーンコンツェウトハウスのハイドンの弦楽四重奏曲 Amajor で、国内盤と米国盤について実施しましたが、ともに Columbia、R、第 4 時定数 Low となりました。

これらの中にはモノーラル盤もあって、特定が難しいのではないかと思われましたが、米国盤は WESTMINSTER の ZANDEN のリストのステレオ盤の特性に一致しています。

ST 氏もヴィヴァルディ四季 PHILIPS（オランダ盤）と PHILIPS（米国盤）を持参され、前者は TELDEC、R、第 4 時定数 Mid、後者は Columbia、R、第 4 時定数 Mid でよかろうということになりました。これは先の LINN LP-12 の再構成(40)の結果の追認になります。

RIAA のみのフォノステージの場合、ZANDEN のイコライザー特性対応を Leak Point 1 のトーンコントロールと Brooklyn DAC+の位相反転でどのくらいカバーできるかの確認では、Leak Point 1 を挿入し、LINE 入力で中継させ、ホロヴィッツのショパンのバラードの RCA 盤で、最初に Columbia、R、第 4 時定数 Low で聴いておき、RIAA、N、第 4 時定数 High にして、その違いを記憶し、Leak Point 1 のトーンコントロールの Bass と Treble を持ち上げますと、バランスがよくなり、さらに Brooklyn DAC+の位相反転を加えると定位がよくなつて一定程度最初の条件に近づいたという感想が得られました。そこで Garrad401 から再生して Leak Point 1 のフォノ入力にしますと、予想外に劣化もなく、真空管のフォノステージの味わいもあるということでした。

さらに Thorens TD124 ではどうかということで ZANDEN のフォノ入力に戻しますと、1959 年代の旧型機としてはこれも十分使用に耐えるレベルとのことでした。

DECCA カーブの盤が多かったので、ケンプのベートーヴェンのピアノソナタとミルシュティンのバッハの無伴奏ヴァイオリンソナタ・パルティータのグラモフォン盤とを TELDEC、R、第 4 時定数 Mid で、また 2019 年収録フルシャ指揮バンベルク響のスマーテナのモルダウのダイレクトカッティング 45 回転盤を RIAA、N、第 4 時定数 Mid で聴いていただきましたが、問題ないということでした。

最後に、STAGE+の配信から、1954 年収録のフルトベングラー指揮ウィーンフィルのドン・ジョバンニのアリアの 2 重唱、カラヤンとワイゼンベルグのチャイコフ斯基のピアノ協奏曲、ホロヴィッツのベートーヴェンのピアノソナタ、ゲオルグショルティアカデミアガラコンサートの椿姫の乾杯の歌などを駆け足で聴いていただきましたが、コンテンツの豊富さや音質面での進歩でグラモフォンの配信サイト STAGE+ のコストパフォーマンスの良さを評価していただけました。

4. まとめ

限られた時間での多彩な内容でしたが、持参いただいた希少盤も含めて、イコライザーカーブや位相、さらには第 4 時定数も加え、盤の由来に応じた選択をすることの意義を感じていただけました。なお、ご持参盤の詳細と選択された条件は、別途アナログ盤特性表としてオーディオ資料室で公開いたします。

また、RIAA カーブでない盤をトーンコントロールの調整で一定程度カバーできることも理解していただけました。この過程で Thorens TD124 や Garrad 401、Leak Point 1 などの旧型機の隠れた良さも感じていただけました。

配信については、コンテンツの豊富さや音質面での進歩も評価していただけました。

以上